

《論 文》

ライフセービングチームレスキューの談話分析に向けた小考 —SERCトレーニングを例に—

立 川 和 美

Discourse Analysis of Lifesaving Team Rescue:
Focusing on the SERC Training

KAZUMI TACHIKAWA

キーワード

ライフセービング (Lifesaving), チームレスキュー (Team Rescue), 談話分析 (Discourse Analysis)

1. はじめに

2017年12月現在, 関東圏(茨城, 千葉, 東京, 神奈川)にある107か所の海水浴場・プールでは, 日本ライフセービング協会(Japan Lifesaving Association, JLA)による資格を有したライフセーバーが, 事故を未然に防ぐ目的で監視, 溺者の救助, 一次救命処置(心肺蘇生やAED)などの業務にあたっている(日本ライフセービング協会ホームページ)^(注1)。監視・救助活動においては, ライフセーバーと要救助者, 一般の海水浴客などとのコミュニケーションが不可欠であるが, それに加えて, チームメイト同士のコミュニケーションもまた, 緊急時下の救命活動では極めて重要である。しかし, ライフセービングのコミュニケーションに関する先行研究は, Surf Life Saving Australia Limited (2004)が見られる程度で, 関連領域では救急救命士養成課程でのコミュニケーションスキルに関する研究(山内ほか2006)や災害などの緊急時のコミュニケーションストラテジーに関する研究(斎藤2009)などにとどまるのが現状である。

そこで本稿では, ライフセーバー養成におけるコミュニケーション技術の指導に向け, ライフセービングのチームレスキューの際のチーム内コミュニケーションにフォーカスし, その分析・考察を行う。

2. 先行研究概観

本稿では, ライフセービングのコミュニケーション活動を取り上げるが, それに先立ち, 関連領域の先行研究を概観したい。

2.1. 国内における近年のライフセービング 先行研究

ライフセービングをテーマとした研究はさほど多くはないが, 近年増加傾向にあり, 多方面からのアプローチが行われている。

稲垣他(2018)は救命教育の実践をテーマとしているが, 「心肺蘇生やAEDといった一次救命処置が施されるため」には, 「AEDがいつでも使用可能な状態で配備されていること」, 「一次救命処置を実践できる者がいること」, 「一次救命を実践する者がAEDの設置場所を認知していること」の3要素すべてが揃うこと, 加え

て、「実践する者が勇気を出して行動できたり、助けたいと思ったときに一步踏み出せたりすること」が必要だと指摘している。そして救命率の向上に向け、稲垣氏らが勤務する大学所在地域の「龍・流連携事業」等を通じて、小中学校、および高校での心肺蘇生に関する授業（ライフセービング教育）を行っており^(注2)、その結果、生徒たちは一次救命の知識と技術の重要性を理解し、96.2%が「救命処置について何かできると思えるようになった」という成果が報告されている。

ライフセーバーのスイム技術について調査した荒井他（2017）は、「屋内プールにおいて開催されるライフセービング競技」の中でも競泳競技に近い種目について、「レースの特徴を抽出することによってレース戦略を考える契機とし、ライフセービング競技における競技力の向上に貢献」することを目的に、200m障害スイム競技^(注3)の上位群と下位群のスイムの特徴を分析している。その結果、「上位群は下位群より入水角が低い」ことや、「下位群では速さにはばらつきが生じた」こと等から、「通常の泳ぎから水中へ潜水するための動作の切り替えやタイミング、障害ネット下端の最も水深がある位置から浮上するための出水角度やスピード」といった技術的動作が競技力に影響すると指摘している。

夏期の海水浴場における事故防止に向け、今後のライフセービング活動のポイントを検証した皆藤他（2018）では、JLAに所属するライフセーバーによるPatrol Log（監視活動記録）とRescue Report（救急車要請事案記録）から、JLAの管轄する海水浴場で夏期に発生した救急車要請事案について調査している。そして、溺水の発生と心肺停止への重症化の因子をもとに、事故の発生を防止するための方策として、「自然要因を回避する遊泳エリアの設定」、「海水浴の際の浮き具使用の啓発」、「飲酒の制限・禁止」がライフセーバーの活動において重点を置くべきポイントだとしている。

大学4年生のサーフライフセーバーを対象

に、卒業後のJLAの会員登録やサーフライフセービング活動の継続について調査した中山（2016）は、「回答者が学生時代に活動した地域のサーフライフセービングクラブにおける体験を通じた活動環境の認知が大学卒業後のJLA会員登録への意欲に関連している」としている^(注4)。さらにライフセービングのスポーツとしての可能性について、「これまでの『する』スポーツや『みる』スポーツに加えて、『ささえる』スポーツの実践の場として、社会貢献型のスポーツ活動が機能する可能性は大きい」と考えている。

以上、本節では、ライフセービングをテーマとした近年の先行研究について簡潔にまとめた。

2. 2. チームスポーツにおけるコミュニケーションに関する研究

あらゆるチームスポーツにおいて、選手同士がコミュニケーションをとり、互いの意思疎通を行うことは不可欠である。また選手一人ひとりがコミュニケーションスキルを向上させることは、チーム全体の競技能力の向上にもつながるものと考えられ、スポーツ科学では競技力との関連からコミュニケーションが議論されることが多い。以下、本節では、こうしたチームスポーツにおけるコミュニケーションをテーマとした先行研究についてまとめていきたい。

内田（2012）では、生涯にわたって運動やスポーツに親しむ力を身につけさせる目的で、中学校の保健体育の授業において、「身体能力を身につけるとともに、集団での活動や身体表現などを通してコミュニケーション能力」の育成を図る実践活動を行っている。

有馬（2012）は、コミュニケーションスキルは、「スポーツ界だけのことではなく、そのほかでも必要とされる」ため、高等専門学校の運動クラブ活動において「専門的な技術指導はできなくても、コミュニケーションスキルを身につけ、プレーヤーの自発的な行動を引き出していく環境を作り上げるためのサポートをするこ

とは可能」だとする。そしてプレーヤーがコミュニケーションスキル向上に「自主的・積極的に取り組む環境」を作り出すための実践活動を行っている。

大学におけるスポーツ実技の授業を扱った大隈（2013）は、他者とのコミュニケーションも「健康の一環」と考え、「授業中の学生間の人間関係の現状や授業を通したコミュニケーション能力の向上感」について、また、これらと「授業満足度との関連性」について調査を行っている。その結果、「授業を通した学生間の関係性」において、コミュニケーション力の向上感と関係性が最も高かった項目は、男女ともに「履修者の一員として互いの存在を認め合えた」ことであり、次が「授業中、うまくいかなかったときに励ましあえた」といった報告がなされている。

松澤・合屋（2014）では、「コミュニケーション・ツールとしてのスポーツの有効性」は広く認められており、「学生のコミュニケーション能力不足が叫ばれる現代、スポーツにかかる期待が各大学で高まって」いる状況を背景として、体育・スポーツ実技授業における「オリエンテーリング」種目を活用した学生間のコミュニケーションを促す実践を行っている。オリエンテーリングを日本国内の教育の場で行う際に期待されてきた効果として挙げられている「問題解決能力・情報処理能力」、「グループコミュニケーションの促進」、「困難克服経験の獲得（周囲と協調・団結しながら目標に向かって猛烈にまい進する人材）」といった項目は、ライフセービングのコミュニケーション技術指導に応用が可能であり、興味深い指摘だといえよう。

2.3. 談話分析に関する先行研究

本節では、言語学・言語教育における談話分析について、近年の研究の中から、稿者が本稿のテーマにつながるものと注目したいいくつかの成果を取り上げたい。談話分析は、文章論や文体論と深く関わり、すでに多くの研究が行われ

ているが、野村（1996）における次の指摘は本稿の分析において示唆に富んだものである。野村（1996）では、「人の行う言語活動において、あるまとまりをもった表現の具体相」をテキストと呼び、「このテキストが、文章論・文体論の研究対象である」とする。そして、「書き言葉か話し言葉かを問わず、実際のコミュニケーション」に即して考え、「抽象的にあたえられた言語資料を扱うのではなく、送り手（書き手や話し手）と受け手（読み手や聞き手）を介らせて言語をとらえる」ことが必要だとしている。さらにコミュニケーションとは、「表現の指示している意味を、一方から他方に対一の対応で転写させること」ではなく、「送り手と受け手は、相互に関わり合い、それぞれが能動的に表現に言及するのであって、コミュニケーションにおいて、受け手は自分自身の環境や知識をたよりに、表現から新たに情報を作り出す」のだとする指摘は、コミュニケーションを動的に捉えながらその本質をついている点で、非常に興味深い。

また、談話分析を幅広い視点からとりあげた宇佐美（2015）では、会話の分析に関する方法論として、次の6種類を紹介している（宇佐美2015を一部要約して示す）。

- 1 サックス (Sacks, H.) らに端を発する社会学の一派としてのエスノメソドロジストを中心に行われている会話分析 (Conversation Analysis: CA)。
- 2 相互作用の社会言語学 (International Sociolinguistics) ガンパーツ (Gumperz, J.) の影響を受けて発展した、タネン (Tannen, D.) らに代表される社会言語学者を中心とするもの (Conversational Analysis と呼ばれることが多い)。
- 3 チェイフ (Café, W.) らに代表される話し言葉の談話コーパスの作成を意識した言語学的アプローチ。
- 4 発達心理学者らによる、第一言語習得研究、養育者と幼児の社会的相互作用研究の

一環として行われている会話の分析，社会心理学者の研究等。

- 5 認知心理学者，認知科学者らによる認知の社会性の記述・解明を目的とするアプローチ。
- 6 情報工学関係の研究者による「ヒューマン・コンピュータ・インタラクション」のメカニズムの解明やロボットへの応用を目的とするアプローチ。

これらの中で，今回，本稿で行う「質的分析」は，エスノメソドロジストたちによる会話分析（CA）を援用するものだが，「会話参加者の持っている前提や常識，言外の意味（含意）や会話における沈黙など」が重視され，その代表的な成果としては「会話の順番どりシステム（turn-taking system）」，「隣接応答ペア（adjacency pair）」，「選好（preference）」，「会話の開始部（opening）や終結部（closing）の構造」などが挙げられている^(注5)。加えて宇佐美（2015）では，「社会の中に生きる人間を，会話という相互作用の分析を通して探求することを目的とするもので，会話自体の分析に加えて，当該の会話以外の，年齢等の社会的要因も質問紙調査やフォローアップ・アンケート等で確認し，総合的に分析」する「総合的会話分析」について紹介している。この分析は，「人間の相互作用に関する言語行動を分析することによって，人間関係の在り方や，対人コミュニケーションのダイナミクスや法則を明らかにする」もので，「量的分析」と，「質的分析」の双方を含み，説得力のある議論が展開できる点で，ライフセービング活動の談話分析において魅力的な手法である。

また社会言語学の領域においても，以下の指摘のように，近年，談話分析が盛んにおこなわれている。

There has been an explosion of research in the area of conversation and interaction in recent years. Conversational discourse is a

topic of treat interest to scholars in fields as varied as linguistics, sociology, anthropology, communication studies, and psychology. This multidisciplinary interest explains the methodological and theoretical diversity of published studies: because researchers of conversation and interaction “set out to answer many kinds of questions about language, about speakers and about society and culture” (Johnstone 2002: xii), it is useful to incorporate insights from a range of perspectives.

Gordon (2011:105)

先行研究の概観の最後に，「わかりあえるコミュニケーション」について考えた石黒（2019）を取り上げたい。ここでは，「コミュニケーション」を，ベルグセン（2007）のいう「プラスチック・ワード（さも重要な内容を伝えるようでありながら，内実に乏しく，使われる文脈に合わせて意味を変える言葉）」の一つであるとし，「それぞれの使用者が恣意的に使ってしまいがちな使用上の注意が必要な，副作用の強い言葉だ」と考えている。そしてこの語（コミュニケーション）につきまとう「幻想」を否定していくことで，この「コミュニケーション」の本質に迫ろうとしている^(注6)。石黒（2019）に提示された指摘は，ライフセービングのコミュニケーションを議論する上で非常に有益だと考えられる。そこで以下では，石黒（2019）の指摘のいくつかをとり上げ，ライフセービングのコミュニケーションの特性について考えてみたい。

まず，「簡単にわかりあえるという幻想」（幻想1）に対して「わかりあえないことから」始めていくのが「コミュニケーション」であるという指摘がある。ライフセービングでは，チーム外の極めて広い範囲の人々（要救助者，海水浴客，医療従事者，消防従事者，行政関係者等）とのやり取りが常に求められることから，「わかりあえない」状況から始まることはコミュニ

ケーションの前提として認識すべき必須事項だといえる。

また、「若い世代がコミュニケーション下手だという幻想」(幻想4)についてであるが、近年、コミュニケーションツールの多様化に伴い、対面や直接的なやり取りを苦手とする若者の増加が指摘されていることは確かである。しかし、石黒(2019)にあるように、これも本当にそうであるのか、考えるべき事項ではないだろうか。そもそもレスキュー活動では分かり合うことが不可欠とされている以上、ライフセーバーを志す若者(大学生)が、コミュニケーション活動に対して「苦手」とか「下手」とかいった意識を持つのかは疑問である。立川他(2015)の調査では、ライフセーバーを目指す学生が積極的に他者と関わりたい、コミュニケーション力をつけたいといった意識を持っていることが明らかになった。そうした結果から、コミュニケーションに対する「苦手意識」に関する問題というよりも、ライフセーバーを目指す若者たちの真のコミュニケーション能力を把握し、一方で救助活動のコミュニケーションの特性を明らかにすることの方が、指導にあたっては求められるといえるだろう。

さらに石黒(2019)では、「コミュニケーションに正解はありません。あるのは最適解だけです」(幻想5)に続き、「私たちはそれぞれ自分らしさを持つ人間であり、自分の好みや考え方に合わせ、自分らしいコミュニケーション・スタイルを模索していくことができます」と指摘している。ライフセーバーを志す学生一人一人が、自分らしさを生かしたコミュニケーションスタイルを模索する作業は、自分の良さを伸ばしながらライフセーバーとして成長していくことにつながる。こうした意味で、極めて魅力的な見解である。

以上、本章では、スポーツや言語学におけるコミュニケーション、ライフセービングに関する先行研究をまとめ、いくつかの考察を行った。

3. 調査分析

本研究では、A大学ライフセービング部のSERC(シミュレーテッド・エマージェンシー・レスポンス競技)のトレーニングにおける言語活動(約3分×6場面)を観察した(2014年4月実施)。本データの収集に対しては、音声言語活動(ICレコーダーを使用)と非言語活動(ビデオレコーダーを使用)の両側面から行い、資料の文字化にあたってはSzatrowski(ed.)(2010)の手法を応用した(今回は、音声言語活動に関する分析を行う)。さらにこのトレーニングに参加したライフセーバーの学生を対象に、救助活動のトレーニング中の発話の意図や発話時の心的状況についてフォローアップインタビューを行った^(注7)。加えて、既に2年以上のライフセーバー経験を持つ学生に対して、SERCトレーニングにおけるコミュニケーションについてディスカッション形式の聞きとりを行った。

まず、今回の調査で用いられたSERCについて、簡単に示したい。SERCは、以下のような競技とされている。

シミュレーテッド・エマージェンシー・レスポンス競技(SERC)は、チームリーダーの指示の下にチームとして行動する4人のライフセーバーの主導者、判断、知識及び能力をテストする。開始前にシミュレーテッド・エマージェンシーの状況は競技者には知らせておらず、競技を実施するには、ライフセービングスキルを適用する。この競技は2分の時間制限内に実施される。すべてのチームは同じ状況設定で、同じ審判員により評価される。競技は男女の区別なく実施され、チームはどのような男女の組み合わせでも成立する。

(日本ライフセービング協会
競技運営・審判委員会編 2018)

このように、SERCは、リーダーの指示を受

けながらどれだけ適切な救助ができるかを競う採点競技で^(注8)、チームは、リーダー1名と競技者3名（ファースト、セカンド、サードの役割分担があり、前二者がおもに水中の救助、サードがおもに陸での救助を担当する）の合計4人で構成される。競技エリアは「室内または屋外の様々な水辺の環境」（日本ライフセービング協会 競技運営・審判委員会編 2018）で行われ、いくつかの事故が同時に発生するという状況が想定され、救助の技術が採点される。

以下では、この競技に向けた実戦トレーニングにおいてチーム内でみられたコミュニケーションの分析を行い、その特徴を整理していきたい（なお、今回は個人情報保護のため、情報収集を行った際の6場面の構成メンバーの詳細については記載を控える。さらに以下の例において、氏名等については同様の理由で一部内容を改変している）。

3.1. SERC トレーニングにみられたチーム内コミュニケーションの特徴

本稿では、今後展開するライフセービング・コミュニケーションの解明に向けた基礎的調査として、これまでのテキスト分析研究（Brown & Yule 1983他）における指摘をもとに、その言語的特徴のいくつかについて、音声言語に特化して観察していきたい。

3.1.1. チーム内での人間関係に関わる表現特性

①呼びかけ：チーム内での呼称

まず、レスキュー中のチーム内談話の開始部分では、必ず相手の名前（チーム内での呼称）による呼びかけが行われていた。チームレスキューでは、複数のライフセーバーが協力して救助に当たる場面が少なくない。その際、「誰」と「どのように」救助に当たるのかを最初に確認し、さらに状況変化に応じて救助方法を微調整していく必要がある。そこでは互いのコミュニケーションは不可欠であり、冒頭での呼びかけが一つの談話のまとまりをスタートする重要

な役割を果たしている（以下の例では、最初のアルファベットがデータ記号、二つめがL = チームリーダー、T = チームメイト（3名の競技者）、算用数字は発話番号を示す。下線部は注目すべき部分である。文字化の原則については、付録を参照）。

（例1）

CT36 良樹さん, CPR 入ります。

（例2）

AT39 莉子さん, 重溺。

（例3）

AL16 森田さん, °これ°だけお願いします。

（例4）

AL38 森田さん, 重溺, 手伝ってもらっていいですか↑

（例5）

CL59 あー, 萩原さん, 手伝ってください。

（例6）

CL19 亜美, いいよ。

（例7）

DL25 洋介, FA 道具, こっち, 持ってきて。

このように、具体的な指示や伝達事項の前に、相手の名前を呼びかけるという発話スタイルが基本であり、単に指示内容だけを冒頭から述べるケースは少なかった。

また呼びかけは基本的に下の「名前」（苗字ではなく）であり、これはライフセービング活動中以外でも用いられているものと考えられる。今回のチームは上級生から下級生までの混成であるが、下級生は上級生を「さん」づけの「名前」で呼んでいた。日本語の一般的なコミュニティにおいて、目上の人を下の名前で呼ぶことはかなり親しい間柄に限られることから、このチーム内において既にそうした緊密な信頼関係が形成されていることが予想される。

このように相手の名前を呼びかけ、続けてその直後に指示や伝達内容が続けることは、発信者と受信者双方が言語行為を「意識的」に行うことにつながり、より正確に情報の授受が行わ

れることが期待される。加えて、この呼びかけが、緊急時の極めて混乱しやすい談話内容を緊密につなぐ役割をも担っており、救助活動における円滑なコミュニケーションに役立っていると考えられる。

②文末表現：丁寧体・敬体の使用

(例1)「～ます」といった丁寧形の「です・ます」形にとどまらず、(例5)「～てください」、(例3)「お願いします」、(例4)「～てもらっていいですか」といった表現が今回のデータにおいては無標(unmarked)な表現である。但し(例2)のような、「重溺」という体言止めの端的な表現、(例6)のような文末に終助詞「よ」が伴われ、受け手に向けた親しみが込められた形、(例7)のように「～て」形の依頼も一部認められた。こうした使い分けは、ライフセービングチーム内の人間関係(チーム内での年功、キャリア)に拠る部分が大きい。彼らの(ライフセービング活動を離れた)通常の生活においても年長者、先輩への尊敬や信頼という基本姿勢が確立されていることにも関係していよう。

レスキュー場面という緊急時であっても、あるいは緊急時であるからこそ、状況に応じて発話者は表現を工夫することが求められる。端的に常態で言い切る形のほうが情報内容の核が的確に伝えられ、ふさわしい表現と考えられる一方、コミュニケーションの受け手が極めて多様であるといった点からは、コミュニケーションスタイルは敬体で進められることが望ましいこともある。丁寧体・敬体を用いることで、ライフセーバーである発話者自身の礼儀正しさや誠実さを受信者に感じさせられるとともに、厳しい状況下で穏やかな雰囲気を作り出すことができる点は、救助活動の中でも意義深い要素だといえよう。そのように考えると、チームレスキューにおいて敬体表現が無標というスタイルが確立していることは、チーム内の人間関係のみならずチーム外の人との、コミュニケーションにおいて効果を発揮しているともいえるだろう。

う。

3.1.2. 内容理解と確認に関わる表現特性：省略・繰り返し

救助活動では瞬時に問題を認識し、要救助者の数、位置、状態、周囲の状況を把握し、ライフセーバーの救助能力に応じて問題解決のための処置を開始する必要がある。救助の方向が固まったらリーダーはチームに救助方法の指示を出したり、適切な器具を提示したり、救急機関への通報を行ったりする。場合によっては、周囲への協力を要請することも必要になる。

こうしたチームレスキューにおけるコミュニケーションでは、他者を理解しようとする姿勢、チーム内での心的なつながり、トレーニングによる経験値などが相乗効果をもたらし、省略された発話を理解するシステムが構築される。緊急時には正確な情報の授受が不可欠であるが、その方策として、(例8)のように発話に対して必ず返答し、適宜省略内容を補いながら同じ内容を繰り返すことが多い。

(例8)

BT6 出血(省略内容：しているので、処置します。)

BL7 出血, OK。

BT8 出血, 処置します。

(例9)

AT30 腕つり, おねがいしまーす。

AL31 °腕つり°, 腕つり, はーい。

(例8)、(例9)共に、発話を受けてチーム内で同じ内容を繰り返し、応答するストラテジーが見られる。(例9)では、リーダーは複数の事故を並行して対処しており、自らが内容を確認する口調での繰り返し(「腕つり」)が見られた。

以下では、より詳細に、リーダーとチームメンバーとのやり取りにおける「省略」と「繰り返し」に着目していく。SERCのサンプル採点

シート（全般）（日本ライフセービング協会 競技運営・審判委員会編 2018）では、「採点の注意点」として、

審判員は、SERCの概要を頭に入れており、チーム全体の効率性を評価する。特に、チームリーダーのチームの管理、すなわち負傷者を手当てするための優先事項の評価及びチームメンバーへの指示を採点する。これには溺者／傷病者の状態についての情報およびどのような援助が必要かということが含まれる。

という記載があり、さらに「採点の項目」の「コミュニケーション」については「リーダーからチームへ、およびチームメンバーと溺者／傷病者間のコミュニケーションとフィードバック」、「溺者／傷病者とチームへ与えられる効果的な質問／明確な指示」という事項が挙げられている（日本ライフセービング協会 競技運営・審判委員会編 2018）。

ここから、ライフセービング活動において、リーダーとチームメンバーとのコミュニケーションが重要視されていることがわかるが、今回のデータに頻出していた「省略」や「繰り返し」という現象は、SERCにおいては正確な情報授受の鍵となる。そこで以下、今回のデータからコミュニケーション活動における省略・繰り返しの具体例を見ていきたい。

まず（例10）のように、呼びかけのみであるにも関わらず、省略されている部分を状況から察知し、相手の要求を受けて先回りをして応答（発話）する「省略」のケースがみられた。

（例10）

CL61 浩輝，浩輝（省略内容：AEDを用意してください）。

CT62 AED持って来ます。

リーダーはチームメイトへの呼びかけを行っているに過ぎないが、この呼びかけの意図（指示）を先回りして理解し、自らの行動予告を行

う談話展開となっている。

次の（例11）では最初の発話を受けて、受け手はすべき処置をいち早く察知して行動に移すとともに、相手の発話内容を理解していることを音声言語で示している。レスキューでは実際の行動だけではなく、端的な表現であっても発話を伴うことで、相手に確実に情報が伝わるため、これも大切なストラテジーの一つである。

（例11）

EL42 引っ張るよ。頭（省略内容：だからその部分を押さえて持っていてください）

ET43 持ってます，持ってます。
（省略内容：頭を）

また、リーダーが自らの指示の中で同じ内容を繰り返す例もしばしば見られた。（例12）は、リーダーが指示を出している場面であるが、指示内容を発信者自らが強く確認する意図が働いており、その判断の妥当性を広くチーム全体に周知しているものと考えられる。

（例12）

EL15 じゃあ、あとふ、たり、ふたり。うん°
ん°。入っていいよ。

EL16 讓太郎、入っていいよ。入っていいよ。

ET17 入ります。

（例13）は救助活動中の例だが、緊急時のディスコースでは、助詞を省略した3文節程度の端的な発話が連発されている。この例ではリーダーの指示に対して、チームメンバーは必ず「理解をした。それに対して自分はどういう行動をとる」ということを発話を伴って実行している。

（例13）

CL27 ロープ投げて。

- CT28 ロープ入ります。
 CL29 ロープ投げて。
 CL30 よし、浩輝、OK。奥、行っとけ。
 CL31 投げるよ、浩輝。
 CT32 わかりました。

リーダーの「ロープ投げて」(CL27, CL29)という同一の指示の間に「ロープ入ります」(CL28)という応答がみられ、さらにこれに対しては「よし、浩輝、OK」(CL30)という応答がある。さらにリーダーは「奥、行っとけ」(CL30)と続け、「投げるよ、浩輝」(CL31)という指示が追加されるが、それに対しても「わかりました」(CL32)と返答するという重層的なやり取りが、極めて短い間に行われている。差し迫った緊急時でも、このように間違いのないレスキュー活動を目指した応答が観察された。情報の授受では、短い発話を通して相手の発話意図をくみ取ると同時に、相手に自らの行為を明示する発話を行っていることが注目される。

また、こうしたやりとりの根底には、(前節で議論した呼称や敬体の使用にも現れていた)チーム内に醸成された信頼関係が大きく関わっている。

以上、本節では、SERCトレーニングにみられたディスコースの音声言語について分析を行った。次節では、こうした発話がなされた背景を探るため、3年以上のライフセーバー経験を持つ学生に対して、SERCトレーニングのコミュニケーション活動に関するインタビューを行う。

3.2. SERCトレーニングのコミュニケーションに関するディスカッション形式の聞きとり^(注9)

大学生ライフセーバー男女3名を対象に、チームレスキューの際のチーム内でのコミュニケーションについて自由討議の形でインタビューを行った。以下では、ディスカッションの内容を稿者がまとめる形で提示し、それに対

する考察を進めていきたい。

まず、チームメイト(リーダーを含む)への呼びかけのスタイルについては、「基本的には下の名前を呼び捨て」であるが、「先輩に対しては苗字(下の名前)+さん」、さらにクラブ内でのニックネームを用いることもあるということであった。先輩の呼び方については、基本は「苗字+さん」であるが、年齢が近い場合(2年生と3年生など)や普段から非常に親しい(心理的に近しく感じている)場合は「下の名前+さん」となり、そういった心理的な近しさは、練習以外にもライフセーバーとして様々な活動(海辺での監視活動や、一般の人々への防災啓蒙活動など)を行っている中で醸成されるとのことであった。小学生や中学生などに対して一次救命の教育を行うなど、レスキュー以外のライフセーバーとしての活動も、チームの心的なつながりを強くする機能があることが示唆された。

次に、チーム内でコミュニケーションをとるときに心がけていることについては、「情報の正確さを徹底している」という答えが多かった。具体的には「分かったと過信して行動することが一番怖いので、たとえ時間的に無駄が出ても内容が確実に伝わっているかを徹底している」ということであった。実際に「陸では何の問題もないコミュニケーションでも、水中では聞こえないことが多い。また雑音も多い」ということで、レスキュー中のコミュニケーションでは予想以上に伝達の困難が伴うという指摘があった。

さらに、日常生活やトレーニングにおけるチーム内コミュニケーションに関して心がけていることは、「相手への思いやり」を全員が第一に挙げていた。それに加え、「励ましを忘れない。しかし時にはあえて厳しいことも(自分でも言いにくいこともあるがあえて)伝える」といった、チーム内におけるメンバー相互の結びつきの強さを高めるためのコミュニケーションを意識的にとっているといった回答も見られた。また、練習などの場を離れてもチームメイ

トとはしばしばライフセービングについての話題があがるとして、「レスキューの手順や役割など、事前に打ち合わせができるようなことは行い、実際に備える」といったライフセーバーとしての自覚を常に持とうという姿勢作りが日常的に確立されていることも明らかとなった。

4. 結び

本稿では、SERCのチームレスキューにおいてみられたメンバー間の音声コミュニケーションを観察し、その特徴を整理した。レスキュー時には、正確で迅速な情報伝達が不可欠となるが、端的な表現（助詞の省略や三文節程度の短文）によるやり取りの中で、状況に応じて確実さを増すための「繰り返し」や「省略」部分の理解が行われていた。また具体的なレスキューを行う前の情報共有の場面では、必ず受け手の呼称を用いた呼びかけを行っており、更に、相手への働きかけを明示する「～て」、「～よ」、「お願いします」などの表現を用いた工夫もみられた。

この他、ディスカッション形式で行ったヒアリングからは、チームレスキューにおいては、トレーニング時のみならず、平常時にも心的つながりを構築することが重要であり、日常のコミュニケーション活動を通して、お互いの発話の個性や思考の傾向をつかむことで、レスキュー時の発話の意図を互いに理解する力が養われていることが明らかとなった。

ライフセービング活動では、ライフセーバー自身が個々の特性を知り、それを生かして臨機応変にコミュニケーションスタイルを選ぶ、そしてチームプレイの中でも自主性をもって自分から積極的に話しかけ、相手を理解しようとする、といった姿勢が欠かせない。レスキュー活動の成果向上に向け、今後、多様な状況におけるライフセービングコミュニケーションの特徴の解明を進めていきたい。

注

(注1) 海水浴場での監視業務は、JLA公認のライフセーバー資格保持者以外にも、日本赤十字社の認定する水上安全法救助員資格を有する者などが行っている。

(注2) 実施は、2017年5月から2018年2月の期間、小学校3校、中学校6校、高等学校2校を対象としており、授業内容は、一次救命処置の一連の流れをみる「デモンストレーション」、心肺蘇生とAEDの重要性を理解する「映像」、胸骨圧迫の実技、AEDの実技などである。

(注3) 200mスイムは、スタートから12.5mと37.5mに設置された深さ70cmの障害ネットの下を200m泳ぐ間に合計8回潜り抜いて泳ぐレースで、ここでは平成25年に開催された全日本ライフセービング室内選手権大会における200m障害スイムに出場した選手を分析対象としている。

(注4) 中山(2016)では、2014年での会員総数は3,387名、登録クラブは130(地域82クラブ、学校48クラブ)で、会員登録の年齢比率のうち20代は60.2%(その多くは大学生)で、彼ら・彼女らの大学卒業後の会員登録の更新および活動の継続がサーフライフセービング活動の普及に重要だと指摘している。またこの調査は、JLAに会員登録してサーフライフセービング活動をおこない、さらに「学生室」に参加している21大学の4年生190人を対象とし、有効回答数は61部であったという。以下、主たるデータの一部を示す。

- ・サーフライフセービング活動を始めたきっかけ：大学入学時の勧誘(26.2%)
- ・サーフライフセービング活動における重視点：監視62.3%、競技37.7%
- ・大学卒業後の会員登録意欲：はい59% いいえ41%
- ・ライフセービング活動にやりがいを感じる：とてもそう思う78.7%
- ・ライフセービング活動をもっと普及させたい：とてもそう思う70.5%
- ・モチベーションを保つのが難しい：とてもそう思う37.7%

(注5) 宇佐美(2015)では、「社会心理学者らによる会話の研究として、「コミュニケーション障害(disorders of communication)研究の一環として行われているもの」や、「高齢者に対するコミュニケーション(communication with older adults)の仕方に、ベビー・トーク(子供に対する話し方)と共通するものがあることを問題視する観点から行われているもの」など、「社会的な問題意識や現実的な問題解決へのニーズが動機となっている一連の研究」が紹介されており、これらもライフセー

ビングのコミュニケーションに応用性が高いものといえよう。

(注6) 石黒 (2019) に挙げられた「幻想」は以下の通りである。

- ・「幻想その1」簡単にわかりあえるという幻想
- ・「幻想その2」単一の日本語によるコミュニケーションという幻想
- ・「幻想その3」円滑なコミュニケーションという幻想
- ・「幻想その4」若い世代がコミュニケーション下手だという幻想
- ・「幻想その5」コミュニケーションに唯一の正解があるという幻想
- ・「幻想その6」コミュニケーションのカギは言い回しにあるという幻想
- ・「幻想その7」コミュニケーションは話し手のふるまいであるという幻想
- ・「幻想その8」コミュニケーションしても何も変わらないという幻想

(注7) 以下、データ例の中に示される「省略内容」は、フォローアップインタビューにおいて発話者から聞きとった内容を加えたものである。

(注8) 競技の採点では、常に救助者の安全が最優先であり、それは採点に反映される。またそれぞれの溺者、傷病者に対する処置とともに以下のような優先順位で評価がされる。

- 1 泳力の弱い人、自力で移動できる人
- 2 危険の迫った人 (泳げない人、けがをした泳者)
- 3 継続的なケアが必要な人 (意識がない人、呼吸がない人、頸椎の損傷が疑わしい人)

(注9) 今回のインタビューは、A大学ライフセービングチーム在籍の3年生の男女3名を対象に行った (実施は2019年9月)。対象者はいずれもSERCトレーニングおよび海浜でのライフセービング活動の経験(3年以上)を持つものである。インタビューは司会者を務めた稿者の発する質問に対してディスカッションを交えた形式で返答するといった、自由発話の形式をとった。なお、本稿では発話者の特定を防ぐ目的で、回答内容をまとめる形で整理した。

引用文献一覧

- 荒井宏和・渋谷暁享・高松潤二 (2017) 「ライフセービング技術における2次元DLT法を用いた定量的評価とレース分析」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』10 1-8
- 有馬弘智 (2012) 「運動系クラブ活動の運営方法について」『香川高等専門学校研究紀要』3 53-55
- 上村有平 (2007) 「青年期後期における自己受容と他者受容の関連: 個人志向性・社会志向性を指標として」

『発達心理学研究』18 (2) 132-138

石黒圭 (2019) 「わかりあえるコミュニケーションとは? ——コミュニケーションをめぐる8つの幻想——」

『日本語学』38 (1) 36-48

稲垣裕美・小粥智浩・小峯力 (2018) 「“いのち”のプロジェクト: 「救命教育」の授業概要及びその実践」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』11 33-40

宇佐美まゆみ (2015) 「『総合的会話分析』の趣旨と方法——量的分析と質的分析の必然的融合——」『日本語教育』162 34-49

内田善弘 (2012) 「生涯スポーツにつながる保健体育受容 (2) ——誰もが楽しく取り組む保健体育の授業を目指して」『滋賀大学教育学部付属中学校研究紀要』54 78-83

大隈節子 (2013) 「スポーツ健康学実習 I における学生間の人間関係とコミュニケーション力の向上感および授業満足度との関連性について」『大学教育研究』21 35-39 三重大学

大谷麻美 (2015) 「話題展開スタイルの日・英対照分析 —— 会話参加者はどのように話題の展開に貢献するのか」『日・英談話スタイルの対照研究』ひつじ書房 193-229

斎藤繁 (2009) 「危機介入におけるコミュニケーション」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』9 21-27

中山健 (2016) 「大学生サーフライフセーバーの卒業後の活動意欲・日本ライフセービング協会への会員登録に着目して」『生涯スポーツ学研究』13 31-38

日本ライフセービング協会 競技運営・審判委員会編 (2018) 『ライフセービング競技規則』日本ライフセービング協会

野村眞木夫 (1996) 「日本語学の対象と方法 文章・文体」『日本語学』15 (8)

ベルグセン・ウヴェ著 糟谷啓介訳 (2007) 『プラスチック・ワード —— 歴史を喪失した言葉の蔓延』藤原書店

松澤俊行・合屋十四秋 (2014) 「コミュニケーション・ツールとしてのスポーツ科目の展開 —— オリエンテーリングを題材として」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』4 181-186

山内亮子ほか (2006) 「救急救命士課程学生のコミュニケーションスキル向上のためのコーチング実習の導入」『杏林医学会雑誌』37 (1.2) 33.

立川和美・稲垣裕美・小粥智浩・小峯力 (2015) 「ライフセーバー養成現場でのコミュニケーションに関する意識について」『流通経済大学スポーツ健康科学部紀要』8 39-48

Brown, G. & Yule, G. (1983) *Discourse Analysis*. Cambridge University Press.

Gordon, C. (2011) "Conversation and Interaction." In Mesthrie, R. (ed.) 105-121

Gumperz, J. J. (1982) *Discourse Strategies*. Cambridge.

- Mesthrie, R. ed. (2011) *The Cambridge Handbook of Sociolinguistics*. Cambridge.
- Surf Life Saving Australia Limited. (2004) *Surf Life Saving Training Manual 32nd Edition Revised*. Australia Mosby.
- Szatrowski, P. ed. (2010) *Storytelling across Japanese Conversational Genre*. John Benjamins.
- Tannen, D. (1993) *Framing in Discourse*. Oxford University Press.
- 日本ライフセービング協会 ホームページ <http://www.jla.gr.jp/home.html> (2021年8月16日閲覧)

文字化資料の表記方法(Szatrowski, P. ed. (2010)より)

- 。 下降イントネーションで文が終了する。
- ↑ 少しだけ上昇イントネーション発話が終わる。
- ， 文が続く可能性がある場合の短い沈黙。
- 長音記号の前の音節が長くのばされている。
- ° ° 間の発話が小さな声で発話されている。

本稿は、2021年度科学研究費助成事業（基盤研究C 21K11527）「ライフセーバー育成におけるコミュニケーション教育プログラムの体系化とその拡張普及」（研究代表者 立川和美）の研究の一部です。データ採取やインタビューにご協力いただいた皆様には、心から感謝いたします。